

# 模写による県内文化財研究と保存継承 II

報告：北田克己

平成 17-18 年度指定研究

「模写による県内文化財研究と保存継承 II」

研究代表者：倉島重友

西田俊英、藁谷実、佐々木正、茅畑孝篤、  
横山由美子、森ゆだね、山谷恭子、高田昌子

報告：北田克己

## 1. これまでの成果

地域文化財を日本画技法による精密な現状模写、復元模写と研究を通じて保存継承しようとする本研究では、県内の代表的文化財である「平家納経」（厳島神社・廿日市市）の模写に取り組んできた。第2期計画年次（平成 17-18 年度）に完成した模写は以下の通りである。

- |                     |          |
|---------------------|----------|
| 1. 平清盛願文・部分（見返し）    | 平成 17 年度 |
| 2. 方便品第二・部分（見返し）    | 平成 17 年度 |
| 3. 安楽行品第十四・部分（見返し）  | 平成 17 年度 |
| 4. 従地涌出品第十五・部分（見返し） | 平成 17 年度 |
| 5. 法師品第十・部分（見返し）    | 平成 18 年度 |
| 6. 勸持品第十三・部分（見返し）   | 平成 18 年度 |

7. 如来寿量品第十六・部分（見返し） 平成 18 年度

8. 分別功德品第十七・部分（見返し） 平成 18 年度

平成 15 年度に始まったこの研究では、上記の 8 点を加え、合計 14 点の部分模写が揃うこととなった。

また、平成 18 年 10 月 9 日から 10 月 14 日には、本学芸術資料館展示室において、これまでの完成模写と研究成果を展示した「時を超えて 一受け継ぐ心と技 指定研究『模写による県内文化財の保存継承』研究成果発表展」を開催し、模写による文化財保存の手法と可能性について学内外に発表を行った。

## 2. 研究手法と課題

現代の模写においては、原本の研究、特に科学調査、試験による最新の知見に連動した技法材料の採用が欠かせないものとなっている。しかし、本研究の「平家納経」模写は現在のところ所蔵側の正式な協力を得ておらず、あくまで学内の研究目的の模写にとどまっており、原本に対する直接の調査も困難である。

このような状況ではあるが、模写制作に際しては最新の学術調査、研究報告を踏まえ、様々な研究課題の抽出と実験を行っている。



図1 金箔を二枚重ね、箔箸ではさみ、熱した灰床であぶる



図2 焼き合わせた金箔を箔台にのせ、竹刀を用いて切る

### 3. 模写制作および研究報告

以下は、平成18年度の模写各担当者の制作と研究の報告である。

#### (1) 法師品第十部分模写 — 截金と合わせ箔について —

森 ゆだね

昨年度の箔の焼き合わせは工業用アイロンによる加熱圧着だったが、今回は熱した備長炭を灰床に埋め、ここに重ねた箔をかざすことにより截金に適した厚みの合わせ箔を作る伝統的な技法で行った。(図1)

箔同士が非常に細かいちぢみを伴いながら全体に均一に熱が行きわたる為よく密着し、截金しやすい箔を用意することができた。密着不良は細かい裁断でちぎれる原因となる。

法師品模写では金箔を三枚焼き合わせたものを截金に使用した。(図2)

この合わせ箔を使用したのは経文の罫線部分の截金(図3)、見返しの大型の裂箔部分である。文献によると見返しの楽器や仏

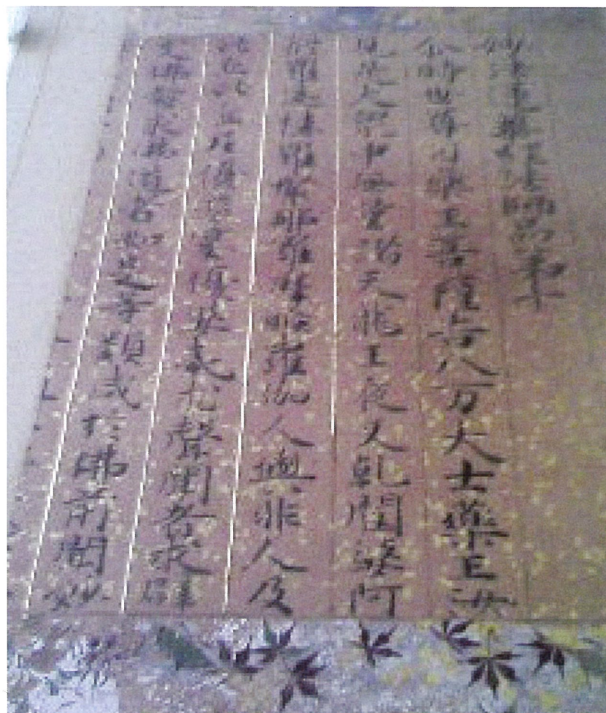


図3 截金を施した罫線部分

具部分にも截金が施されているとあったが、技術的に難しかったため、それら部分は金泥で描きメノウ棒での磨きを用いた。

#### (2) 勸持品第十三部分模写 — 料紙について —

岩宮 恭子

本紙の料紙は表面がある程度平滑で、染色、上げ写しの運筆、裏打ちが容易であること等を考慮し、昨年度と同様、高知県立紙産業技術センターに依頼して漉いた紙から、楮70パーセント/雁皮30パーセントの紙を使用することにした。

平家納経は金銀装飾の華麗な料紙が用いられている経が多く、この勸持品も、丁子染めの上下縁に臘脂のぼかしを施した料紙である。この料紙の作製段階で撒かれた金銀砂子、切箔、裂箔、野毛、泥は、その上に描かれている絵の表現の一部として、輝きに満ちた空間演出に大きな役割を果たしている。例えば、立ち込める霧、女性の衣、下部の山、地面の縁の曲線においても、金銀と彩色部分が意識的に織りなされていることが見てとれる。これまでの経験から、このような装飾効果による美しく、奥の深い空間描写を再現する為には、実際の工程に可能な限り近づいて行うことがより肝要であるという結果を得ている。その工程の一部を想定してみると以下ようになる。

料紙作製(染色・金銀の装飾)→墨の線描→彩色

ここで模写において欠かせない上げ写し工程については、生紙の状態で行うことが最善であると考え、模写の工程は

上げ写し→料紙の状態にする(染色・金銀の装飾)→墨を再度描き起こす→彩色

とすることにした。箔、絵の具にそれぞれ古色といわれる経年による汚れ、褪色を加味し、現状を写し取った。

結果として、料紙作製という工程を意識することにより、岩絵の具の彩色の下に見えている金銀の輝き、構成の妙味を損なうことなく模写することが出来た。洞察と想像を駆使し、柔軟に省ける工程は省きながらも、いかに実際の工程に歩み寄るかも現状模写において重要であると改めて感じた。

#### (3) 如来寿量品第十六部分模写 — 截金砂子の再現について —

高田 昌子

前回までの模写からの共通の課題は、砂子、截金部分の再現方法である。

美しい茜色に染められた紙に撒かれた銀砂子の再現は難しい。特に金属の厚みや砂子の質感、焼けた色の表現に注意を払い、截金砂子の技法を考察し直した。

砂子部分は当初泥を用いて筆で描き、銀泥の酸化した色や質感はプラチナ泥、銀泥、黒箔を併用して再現した。この方法は色の調節が容易で、上げ写しの線を意識しながら作業出来るが、筆跡が残り、色が沈み、質感の再現は不十分である。そこで今回は生麩糊を薄く塗布し、プラチナ箔の砂子を撒くことで金属の重厚な質感を出した。茜染めの紙は泥だけでは色が透けて見えてしまうため厚く砂子を撒く必要があった。

この方法を経文部の天界・地界部分で見られる波型文の空摺の下地にも用いた。厚く砂子を撒いた紙では、版木の模様を擦り出しやすい。しかし前回の安楽行品では、最終的に模様がかなり薄くなってしまった。これについて文献で調べたところ、擦る前に染紙を軽く湿らせておくことで補えそうである。下地の彩色を済ませた紙を摺りだし部分の裏に平筆で水分を加えてしばらく置き、しんなりしたところで版木に乗せて、先のきく丸みのある石を用いて擦ることによって、くっきりと模様を写し出す事が出来た。

経文部の罫線の截金部分は、これまでチタン胡粉と金泥を併用した物で再現していたが、特に幅わずか一ミリ程度の截金の、細くエッジのきいた表現は難しかった。そこで切れの良いハサミを使って裁断し、塗布した生麩糊上に置いていく事で十分な表現を得た。しかし、時間と裁断の失敗による無駄が多く、截金の裁断方法は今後課題としたい。



図1 丁字 20 g を水 100cc で 10 分間煮出したもの

#### (4) 分別功德品第十七部分模写 — 料紙の染色について —

横山 由美子

この巻を模写するに当たって見返しの料紙染色を課題とした。文献には、「丁子染めに紫の村濃」とある

— 丁子染めについて

丁子は香料としては「丁香」と呼ばれ、古来から着物や料紙などを染めて香りを楽しんでいたようである。

平家納経にも料紙を丁子で染めた巻があり、これまでの模写では矢車と墨を混ぜたものなどで代用していたが、実際に丁子染め料紙の実験をすることにした。

〈実験結果〉

媒染（アルミ媒染）によりかなり黄色味の強く発色の良い色になった。これに墨などを混ぜて抑えても（図2）、現状模写の下地としては不向きであったため、前回模写のとおり、矢車と墨を混ぜた染料で下地染めをすることになった。

— 紫染めについて

紫色の染めには古来から「紫草（紫根）」が用いられた。見返し上下の紫色の村濃は、特に上の方が相当に黒変しており、元がどのような紫だったか、文献にある通り「紫」であったかは判別しがたいが、「紫根」を使って実験してみることにした。

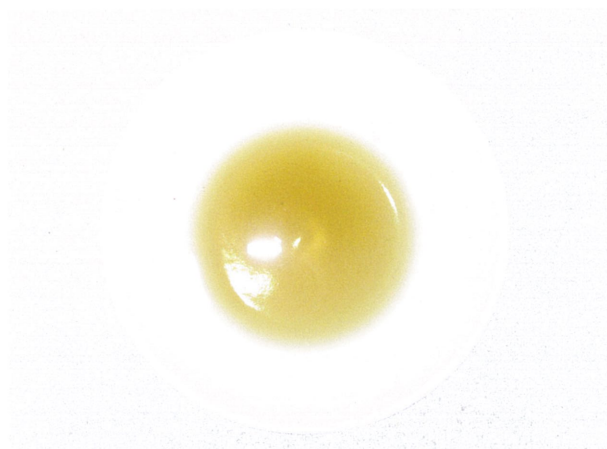


図2 丁字 + 墨

#### 〈実験結果〉

紫根の染めは、色が安定して出にくいことや、一度に濃くすることが不可能で、原本のような濃さを出すには何度も重ね染めが必要である事、また見返しに残る色は赤味がかかった色であるのに対し、実験では青味がかかった紫になったことなど、模写の下地を使うには問題点が多く、採用できなかった。別の染料による赤紫色の可能性も高いように思う。

実験を通して、煮出し方や染め方、その他の諸条件で不安定に変化し、染色後も変色しやすい染料は、現状を継承する目的である模写への使用を最小限に抑えるべきであると感じた。

#### ー丁字染めの実験行程

- ①丁子 20 g に水 100cc を加え、10 分ほど煮出す。(図 1)
- ②この液を使って、1 度塗りから 3 度塗りの 3 パターンを用意した。
- ③乾いてから明礬で媒染。(媒染液の濃度は 1%)

#### 4. 今後の研究と課題

引き続き、「平家納経」の原本所蔵側との信頼関係の醸成に努め、本格的な調査を伴う模写、研究の実現を目指してゆく。しかし、年を追って模写の品質は高まり、研究も深まりを見せている。この研究をさらに充実させて、少しでも制作当時の技法材料に肉薄してゆきたい。

#### 謝 辞

本研究においては、指定研究採択による本学の援助と併せて、藤本黎時本学前学長、高知県立紙産業技術センター、保存修復の岡墨光堂はじめ、多くの方の支援と助言、協力を得ている。心よりの謝意を表するものである。

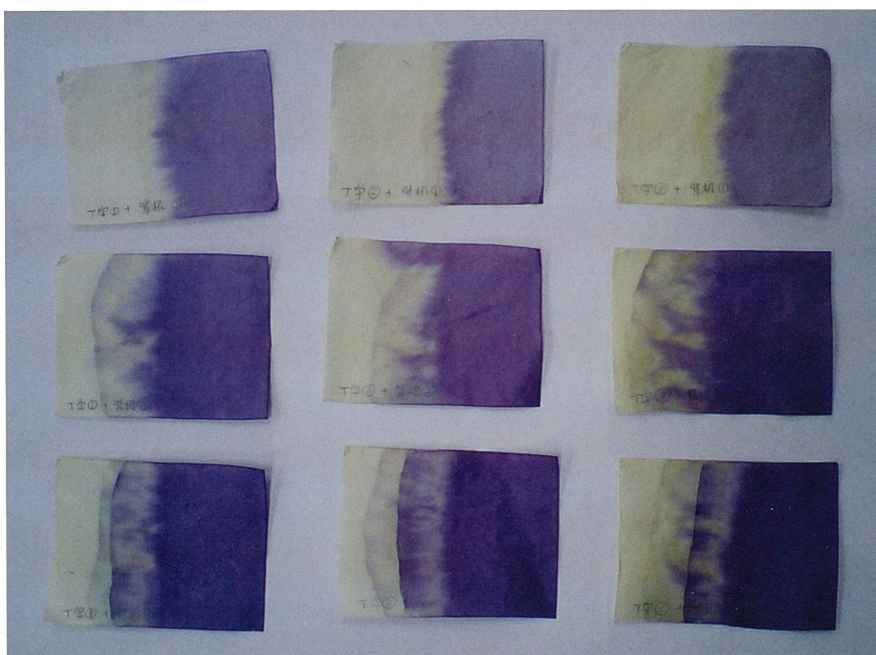


図3 丁子が乾いてから紫根の染料をぼかして入れたもの